

# 城崎温泉の歴史

立木 惇 三

## The History of Kinoshiki Spa

Jyunzo TSUIKI

最初にお断りしておきたいが、当初の予定よりお話の持時間が少なくなったので、江戸時代の城崎温泉の歴史を中心にお話し、江戸時代以前、明治・大正時代、平成時代は城崎温泉史の構成上是非必要と考えられる点のみをあげる。

### ◆江戸時代以前◆ (略)

先史・原始時代に山陰地方の温泉が伝説や史実に登場する機会は見当たらない。飛鳥・奈良時代に入ると、温泉発見、天皇の温泉行幸のことなどが史実として登場してくる。山陰地方では城崎温泉の鴻の湯(629年頃一鴻)、同曼陀羅湯(720年一道智上人)、有福温泉(650)、丹後の木津温泉(742)などが発見された。養老4年(720)1月8日に発見されたといわれる城崎温泉“曼陀羅湯”の発見伝説によれば、道智上人によって発見したとされているが、上人の墓碑は温泉寺境内に建立(明和8年=1771)されており、浴場の前庭にはこの湯の由来を刻んだ碑(文学博士三浦周行の撰文)が建てられている(大正14年)。天平10年(738)十一面観音(国宝)を祭るため伽藍建立の大願を立てた道智上人は温泉寺を建立したが、こと天聴に達し聖武天皇から「末代山温泉寺」の勅号を賜った。また仏教の伝来にともなって温浴の思想が布教への大きな手掛りになり、施浴がはじまった時代でもある。

ついで平安時代に入ると、空海、有馬温泉中興の恩人仁西上人などの高僧が輩出して仏教が大衆に浸透定着し、各種の施浴が行われ、また薬湯も普及していった。また山陰地方でも高僧、貴人などによって、海潮、岩井、湯村(兵庫)、湯の郷、俵山、吉岡、湯原、三朝、川棚などの温泉発見伝説が続出している。

つづく鎌倉・室町時代には、施浴、各種の風呂講、五木八草湯など薬湯はますます普及したが、これとは別に天然温泉の汲湯による湯治が高貴の間で流行した。これは温泉湯治の簡略な手段で都から近い有馬温泉の湯はしばしば利用せられた(湯山湯・有馬湯)。さらに直接的な温泉湯治も次第に大衆化していった。都の公家階級の温泉行といえはおもに病気の治療、静養のためであったが、湯治にかこつけての物見遊山もあった。当時の温泉行は嵐山の溪流沿いの鉱泉、有馬の汲湯、有馬・城崎温泉への入湯、また加賀方面への入湯などもあった。近衛政家『後法興院記』には有馬湯治について詳細に記されている。

この当時都から近かった城崎温泉は京洛縉紳消閑の地として栄えた。例えば

- ①後堀河天皇の安嘉門院が行啓(文永4年—1267)している。『増鏡』巻9のなかに  
安嘉門院，丹後の天の橋立御覧じにとておはします，それより但馬のきのいで湯めしにく  
だらせたまふ，為家の大納言，光成の三位など御供つかまつる
- ②弘長元年(1261)には山階左大臣西園寺実雄(『新後撰集』)
- ③少し時代は下るが『徒然草』の著者吉田兼好
- ④義政の頃連歌師宗祇法師
- ⑤天文17年(1548)には鷹司冬平公は飛鳥井教卿とともに城崎温泉に来遊して，いずれも教寄の  
道で温泉寺に参詣して蹴鞠を催した。

さて温泉を対象とする湯治という言葉があらわれたのは湯田温泉(山口県)が最初だといわれて  
いるが(『大内家壁書』)，藤原定家の『明月記』の嘉禄2年(1226)7月2日の項に

去月下旬に治部卿藤原範基が飲水病にかかり毎度木崎湯治(城崎)と称して但馬国領に出掛け  
ていたが，そこで死亡した

と記るされているから，実は城崎温泉のほうが大内家の壁書より百年以上も早い。

応仁の乱(1467)を転機として次第に戦国の世に移行し，群雄が割拠して戦に明け暮れる日々  
が続いた。信玄の「かくし湯」は有名であるが，山陰地方でも湯真賀，海潮などその例がある。  
また江戸時代にさかんとなった銭湯のはしりがみられ，湯女の記事も散見される。室町時代の中  
期以降，公家，武家の間でしばしば風流汗汗(一種の接待風呂)も流行した。

### ◆江戸時代(1609～1867)—含安土，桃山時代—◆

▼湯治願—通行手形—物見遊山  
藩士，一般の庶民が藩外は勿論，藩内でも土地を離れて湯治にでかけるときは，湯治願をその  
筋に提出して許可を受けなければならなかった。もっとも直接に藩に届けでる必要があったのは  
大庄屋，宗旨庄屋までで，それ以下のものは村庄屋をへて大庄屋まででよかった。

★鳥取藩内で宝暦3年(1753)～安政元年(1854)に記録された湯治願をみると城崎温泉，玉造温泉，  
湯原温泉など他藩にわたるものも数多くあり，湯治期間も三廻り(7日×3=21日)がもっとも多  
く，1カ月にわたるものもあった。許可がでると，旅行証明書「往来手形」を発行してもらい。藩  
政時代も中期をすぎると，医療と遊山をかねての温泉湯治は一層さかんになったが，当時の湯治  
行は一種の医療であったから藩でも大目に見ざるをえず，信仰にかこつけての社寺参詣の旅と同  
じように比較的自由に行なわれた。

▼温泉道  
各方面から温泉地へのアクセスのよしあしは，その温泉地の繁栄を左右する大切な条件である。  
天下の名湯といわれた草津，有馬，熱海などの場合はその温泉道形成の一つをみても古い歴史が  
あり興味深い。

◇a 京阪方面より  
宝暦13年(1763)に出版された『但州湯島道中独案内』(後述)は画期的なガイドブックであるが，  
これによる城崎への道は

1. 京より福知山越 三十五里半十四丁
1. 大坂より三田越 三十九里六丁
1. 大坂より播磨廻り 五十一里二丁
1. 福知山より丹後名所廻り

の4道中についての詳しい記述がある。そして“右いづれの道も豊岡と云所に着、豊岡より三里川舟下”っていった。

三井家五代高英の妻静(せい)が文化4年(1807)に城崎に湯治したときには、4番目の丹後名所廻りで「天の橋立」にたちよって6日間の行程で京都から城崎湯島に到着した。

◇ b 山陽方面より

讃岐から海を渡って城崎に湯治した菊地武雅の著『湯島記』に詳しい。

◇ c 因幡・伯耆方面より

◇ d 隠岐島から

寛政10年頃(1798)西国巡礼を思いたった知夫郡宇賀村の万蔵とその姉よしは、海路で但馬の柴山港へ、また天明8年(1788)、お伊勢参りを終えて、城崎温泉で3日間を楽しんだのは焼火山住職快栄であったが、その道中記『参宮道中日記』によれば、帰途は但馬の諸寄港から隠岐へ船便で西郷港に直行している。

### ▼掟

### ▼様子

◇ a 概況・宿の発達・温泉組合・設備

★文化7年(1810)に八隅芦庵があらわした『旅行用心集』によれば当時城崎温泉は

[但馬] 城崎 曼陀羅湯 新湯 瘡湯 常湯 御所湯 乞者湯 東槽 西槽

城崎の温泉ハ日本第一の名湯とす、其中にも新湯、瘡湯ハ其効能抜群なりといふべし

★またこのころ発行されはじめた「温泉番付」には山陰地方の温泉では西の関脇に但州城崎の湯、前頭に但馬湯川原の湯(湯村)、伯州徒見の湯(勝見)など。

★城崎温泉に湯治する人達の多くは知人、縁者をたよって入湯中の旅舎にあって、浴客もまたただ宿舎を借りるだけで日夜の飲食は自弁であった。ために主客転倒して入湯は全く恩恵的で土地の人は自然浴客から旦那と呼ばれていた。しかし寛延のころ(1748～)には温泉の繁栄にともなって土地の富豪も次第に旅館制度に変わり、公然と宿料を約するようになった。そして旅館屋号を称する旅館制度の発達がみられるようになり

①寛延2年(1749)の四所大明神再建の記録には、17軒の旅館屋号が記されている。

②そのご約50年たった寛政11年(1799)の『温泉寺年中行事』には宿屋は59軒と急増している。

城崎温泉の繁栄の証左である。

③そして幕末には宿舎組合を組織して修進社と称し宿舎は63軒となった。

文化6年(1806)の『湯島道中独案内』には当時の城崎温泉のすべてが詳細に解説されている。

とくに城崎温泉を特徴づける外湯についてはその「温泉の次第」の項に

☆新湯(あらゆ、一の湯とも云 二の湯 其源。あらゆなり。効能相同し

三の湯 其源。一、二の湯による

☆中の湯、一名かせ湯 ☆常湯 上湯とも ☆御所の湯 ☆まんだら湯

都合五ツ也、如斯差別を正す上ハ、あら湯を最上至極とし御所湯を第二とす、されば但馬湯治といへば、此二ツの湯の事と心得、…………

☆幕湯(留湯、鍵湯など呼ぶことがある)→(有馬)

入込む(湯)にては人おしをふておもうやうに入られず、心さハがし、殊更身に痛所ある人など甚難儀なり必ず幕湯にすべし、幕湯にすれハ湯女人をほどよく其上をふせぎて入らしめず、よってあせらず入ニ心よし 幕湯一日に三度ツム、湯女よびに来る。…………

◇ b 宿泊料と湯銭など湯治費用

江戸時代の温泉湯治は一週間ないしそれ以上に滞在する 경우가多く、七日前後が湯治期間の単位とされており、「一廻り湯治」と呼んでいた。当時の湯治客は今日と違って療養本位であり、湯治中は食糧など湯治客自身が携帯して自炊を建前としたから湯宿のほうでもそのように設備され、一廻りでも長く逗留する客を歓迎した。藩主やその家族が温泉湯治にでかけるときには医者や料理人までも随行させたが、一般の湯治客は旅籠から自炊道具を借り宿の自炊設備をつかって食事を作った。自炊の場合は所帯道具や膳、碗の類いは無料で借することが多く、夜具などは借用し、自炊のための米、味噌、薪、醤油、油などは必要に応じて通帳に記入しておけば宿の方で調達し、出立の前日にまとめて支払うことになっていた。「入湯費用帖」が草津、四万などの温泉地に残っているが、これらによって当時の入湯風景、湯治の様子を推測することができる。

★ここではさきの京都三井本家の祖母が城崎温泉に湯治した時の様子を記す。

このときの道程はさきにも触れておいたが、この間の交通費として

京より城崎迄	人足代	銀百四十九匁
〃	人足祝儀	銀 二十九匁
道中途中の入費	金	三両二朱

また大津屋七右衛門へ宿をとり、勿論旅籠式ではなく自炊式のしかも長湯治であった。

宿の召遣女五人へ祝儀、宿主人及び妻へ、宿手代、惣湯支配人菊屋清助へ、口の湯 湯女三人へ、曼陀羅湯 湯女一人へ、入湯三廻り目ニ付惣支配菊屋、宿女中、曼陀羅湯湯女へ心付

計 銀札三十五匁六分

このように一廻りごとに心付をする風習があった。

このほかにも直接入湯療養の費用とは別に神仏の御賽銭やその他の入費があった。

湯場の燭代、宿の庭掃除代、宿座敷代、蒲団代、蚊帳損料、温泉寺寄付(薬師堂再建費へ)、温泉寺薬師御膳料、宿にて自炊食料品代、燈明油、酒、醤油、味噌、塩、酢、炭、薪、茶、荒物、入湯用杓子、下駄、布巾、大根漬物、たどん、土瓶、糠、胡麻油

この会計記録のなかに当時の入湯の実情の一端を伺うことができる(『越後屋覚帳』)。

◇c 湯治の様子—娯楽と遊び—

★温泉湯治も一廻り、二廻りと長逗留になると退屈になりがちなのは人情というもの、心得たもので温泉地にはいろいろな娯楽の設備が備わっていて、土産物なども準備されていた。『熱海温泉図彙』(文政13年=1830)には「遊楽、旅客逗留中のたのしみをしるす」として娯楽設備と四季の慰みをあげている。草津温泉でも楊弓場、吹き矢場、飲み屋、茶屋、寄せ場、世見世、貸本屋など海辺遊びを除けば熱海と変わらぬ楽しみがあった。屋外の楽しみができぬときの湯治宿の様子はどうだったであろう。部屋の仕切りを取り払って茶を自分でついで飲む者、煙草をくすらす者、軍記物に読み耽る者、碁盤に烏鷺をたたかわす者、恋仲でもあるのか男女が向かい合っている濃艶な場面、短冊片手に頭をひねる者……“かくさまざまなるは秋野の千草いろことなるやうにて、とりどりによはひのふるさま”が湯治客の姿であった。この半面に療養を目的とする湯治行がしばしば淫靡に流れることもしばしばであった。楊弓場の女、壺廻り(部屋)女、飯盛女、さては湯女と呼ばれる女たちとのかかわりあいである。

この時代、山陰地方では熱海や草津ほどではなくても、城崎温泉は比較的賑やかであった。

天明4年(1784)の金谷上人の『金谷上人行状記』によれば当時の城崎は楊弓場、大弓の射場などの遊戯場のほか、うどん、そば、ぜんざい、でんがく、あん餅、酒さかな、鍋焼き、しっぽく、甘酒など「昼夜を分たず触れ歩く」。果物なども各地から船で運ばれ「運搬の魚類は山を成し、しかも価の安いこと、銀一粒も出せば、目の下一尺二寸のフグ、ブリであれ、タコであれすぐ手に入るし、鳥はガンでもカモでも選り取り見取り」で

あった。さらに貸し物屋があって琴、三味線、鼓、太鼓、琵琶、尺八、碁、将棋、すごろく、刀や槍まで「注文すれば何でも持参して、たいした貸賃も取らずに貸してくれる」。上人は各地から集まった文人墨客と兄弟のように付き合ったり、小船を買って瀬戸、津居山へ乗出し潮来節を歌って一日を過ごした。

と多少の脚色はあるとしても、湯治客で賑わう城崎温泉の様子を記録している。  
★また貸本屋はわが国に限らず、当時のヨーロッパの温泉地でも必ずあったが、城崎にも貸本屋中屋甚右衛門があった(『城崎温泉中屋甚右衛門と入湯客』)。

#### ◇d 風習—かむり湯

城崎温泉には古来柄杓で湯をかけて入湯する風習が残されているが、温泉寺第12代別当祐智上人の記録(万治2年1659「湯壺に用ゐる柄杓の由来」)が残っている。その医学的効果については香川修徳『一本堂薬選』、貝原益軒『有馬湯山記』などに説かれているが、この風習は東北をはじめ、草津、四万など、山陰の吉岡、岩井などにも残っている。

#### ◇e 温泉土産

箱根の「寄木細工」、鳴子の「こけし」、有馬の「有馬人形筆」などが有名であるが、城崎温泉では柳こおり、海苔、湯の花、楊枝、つくばね、宮津絹、桑の木細工、麦蕎(むぎわら)細工などがあった。この麦蕎細工は享保年間因幡の人半七が城崎にきてこれを始めた。その碑が温泉寺薬師堂のそばに建立されている。「雪月道伯因州半七の墓」である。

#### ◇f 温泉地の社寺、薬師などのこと

古い温泉地には必ず温泉神社、温泉寺、温泉薬師などがある。

### ▼温泉地の地誌、紀行文など

藩政時代の温泉地についていろいろな角度から記してきたが、これらはすべて当時の地誌、入湯日記、紀行文、古文書などによった。年代を追ってあげれば

★宝永2年(1705)—讃岐の人菊地舎人武雅は城崎温泉に湯治して『湯島記(驪山之泉療養)』の中で往復の道程、当時の城崎温泉の有様、湯治の仕方などを記している。名文。

★享保18年(1733)—河合章堯は『但馬湯嶋道之記』を著し、幕湯について触れている。

★元文3年(1738)—香川修徳(修庵、字は太仲または一本堂と称す)は城崎温泉に来遊して新湯(あらゆ)に浴したが、温泉医学の創始者といわれるその師後藤良山の説を確認し、『一本堂薬選』を著した。その中で城崎温泉の卓効につき“我邦諸州極めて温泉多し、而して但州城崎新湯を海内第一と為す”と激賞した。当時の医学の第一人者が海内第一泉と称したため、「一の湯」と名付けられるようになった。昭和17年には当時の温泉学の泰斗藤浪剛一博士も“昭和の今日海内第一湯と称するも敢えて過言ならず”として、昭和37年、一の湯の前に「海内第一泉」の碑が建立された\*。

\* 小澤清躬『有馬温泉史話』(p189~194, 210~214)

文化13年(1816)に、浪華の医家拓植龍洲が『温泉論』4巻を著し、大いに有馬温泉の優秀にして卓越せることを推賞してゐる。殊にその附録の中には、往年の有馬温泉と香川修庵の関係の載せてあるが、このことは当時の有馬の旅館兵衛らが、有馬温泉の衰運を憂慮して有馬最良の龍洲によって、かつての修庵の意見を反駁してもらうために、その間の事情を龍洲に訴へたものであると察せられる。現在の温泉浴場の北西の角に「日本第一神霊泉」の七文字を大きく刻んだ四角の石標がある。

★宝暦13年(1763)—『但州湯嶋道中独案内』が出版された。その内容と構成は温泉地としては画期的なガイドブックである。最大の特徴は手のひらサイズで携帯に便利のように配慮され、構成

は温泉の由来、名所などをはじめ京、大坂からの道中案内など。文化3年(1806)には改定版が出版されている(文芸館)。

★安永3年(1774)―城崎温泉の温泉寺第17世祐淳は『但州城崎温泉論』を著したが、その中で後藤良山、香川修徳などの温泉論をいろいろと批判している。

★文化3年(1806)―上田秋成は藤妻冊子の中の『秋山記』に城崎温泉の湯治風景

★文化4年(1807)―三井家第5代三井高英の妻静の湯治のことは、小林吉郎治の『但馬湯島日記』という手控、三井家に残されている『於静様御湯治但州御下向一卷』(文化四卯歳5月9日)などに詳しい。この三井家の記録は、山陰の温泉史、また全国の温泉史においても貴重な記録である(三井高陽著『越後屋反古控』中央公論社)。

★文政2年(1819)―倉谷安斎は城崎温泉の案内記『但馬城崎湯治指南車』を著した。  
温泉の由来、温泉の効能、宿屋並所者慎之心得、湯治宜病人之弁、湯治悪病人之弁、病症之論、湯治行者之心得、道中之心得、湯治中養生之弁、温治人食物悪荒増、温泉之次第一新湯……曼陀羅湯一、温湯之論、欲湯之論、入浴の指南、帰宅後養生之心得、迎湯之事、諸国温泉の荒増

と詳細にわたっている。この時代の代表的な湯治指南書である。

★文政5年(1822)―台山訥堂上人は『但馬城崎紀行』を柳枝軒から発行した。城崎温泉の案内記の一種であるが、湯女のことなどを記している。

★天保3年(1832)―京都の物産学者・山本篤慶仲錫は山陰四州の採薬をして『山陰四州採薬記』を残し、当時の城崎、湯村、岩井温泉の各温泉地の様子を詳細に記している。

### ▼温泉地の訪れた人々

さまざまな階級、社会の人々が、或は湯治・療養、物見遊山、隠栖、仕事のための道すがらにと、まことに多彩にわたっている。比較的著名な人達の温泉行について抽出してゆく。

★寛永15年(1638)―沢庵和尚が故郷出石に帰国し城崎温泉を訪れ数多くの歌を残した。

★宝永2年(1705)―菊地舎人武雅(高松藩の儒官)は下疳をわずらい、一廻り湯治ののち完治した。この間『湯島記』を書いたが(前記)、「……この湯の効果は虎をうち山を抜く勢いだ、私一人ではなく天下にこのすばらしい湯を知らせたい」と最大級の賛辞を送った。

★天明4年(1784)―金谷上人は『金谷上人行状記』(平凡社・東洋文庫)を記した(前記)。

★文化4年(1807)―寛政三博士の一人柴野栗山が来湯した。彼の紀行文によって城崎温泉は一躍世に知られ、来陰する文人は必ず城崎を訪れるようになった。

★弘化2年(1845)―漢方とオランダ医学者・新宮涼庭は再度城崎温泉を訪れ油筒屋に宿り『但泉紀行』を残している。幕末も近い当時の城崎について

山間に三百余家が並びて街をなす、逆旅五十、皆温泉の周りに家を造り楼を起し皆三階、極めて壮麗、……西村氏はその雄也、館余百余室あり

★慶応元年(1865)―桂小五郎。尊攘派が入り乱れていたころ、勤王家たちは城崎温泉入湯に託して密計を画し入り込んでいた。小五郎(のちの木戸孝允)も愛人幾松とともに松本屋(現在のつたや)に潜伏した、昭和8年つたやの前に「維新史跡・木戸松菊遺跡 松本屋敷跡」の石碑が建てられている。なお西郷南洲、平野国臣ら多数の勤王家も来湯していた。

## ◆明治～平成時代◆ (略)

## ●I 明治・大正時代(1868～1912・1912～1926年)

「陸の孤島」といわれた山陰地方は、浜坂～香住間(余部鉄橋の完成)が開通し明治45年3月1日には京都～出雲今市間の山陰線が全通、京阪神からの交通は一挙に便利になった。

## ▼温泉地の紹介

大正7年『温泉めぐり』(田山花袋)、大正9年の鉄道院の『温泉案内』の発刊を機に全国の温泉地では温泉案内書がつぎつぎに発行された。城崎温泉でこのころ発行されたものを手元から拾ってみると、三宅竹隠『城崎温泉雑誌』、三宅徳介『但馬城崎湯島温泉案内記』、斎藤甚左衛門『但馬城崎温泉案内記』、但馬城崎温泉事務所『城崎温泉誌』など。なかでも『城崎温泉誌』は全国的にも模範的な温泉誌の一つである。

## ▼温泉地の出来事

温泉社会史的な主な出来事を拾いあげるととどめておく。

★明治14年—昭和初期の内湯紛争に先立って内湯をめぐる事件は度々城崎でもちあがっていた。最初は明治初年の「陣屋の湯堂事件」である。

★明治37年日露戦争で城崎は「姫路第十師団傷病兵転地療養所」の誘致に成功、傷病兵だけではなく慰問の家族らで賑わい空前の活況を呈した。

★大正14年5月23日—「北但大地震」で城崎温泉の壊滅

## ▼温泉理学の研究と温泉医学の発達

西欧科学の導入によって理学、工学、医学などの近代科学が急速な進歩をみせるなかで、次第に温泉が科学的に解明されるようになった。文明開化の波は山陰地方にも及び、はやくも明治8年には城崎温泉に温泉分析の記録が残されている(伊香保温泉と同年)。

温泉が医学的に諸病にきくことは古くから知られていたが、その医学的研究が本格的な発展をみるのは明治に入ってからで、ベルツ博士の指導以来のことである。

江戸時代には原雙桂『温泉考』、柘植龍州『温泉論』、宇田川裕庵『諸国温泉試説』などがつぎつぎに刊行されたが、明治に入って温泉医学の研究の成果は数々の名著を生んでいる。太田雄寧訳『温泉論』、ヘルツ『日本温泉浴案内』、桑田和明訳『日本温泉考』、ベルツ『日本鉱泉論』、内務省『日本鉱泉誌』、緒方正清『浴療新論』、太田秀次『日本気候療養地論』、大塚陸太郎『鉱泉気候療法論』、内務省 *Bade und Luftkurort von Japan* (日本の温泉地及気候療養所) などであり、年をおって温泉医学の発展する過程をみることができる。

## ▼温泉と文学

★明治、大正の文豪はしばしば温泉地に遊び、温泉地を背景にかずかずの文学作品を生んできた。これはまた温泉地のPRにもなり、温泉と文学とは大きなかわりあいをもってきたが、これらのなかから代表的なものをあげれば

尾崎紅葉『金色夜叉』(塩原・熱海)、徳富芦花『不如帰』(伊香保)、夏目漱石『坊ちゃん』(道後)・『草枕』(小天)、志賀直哉『暗夜行路』(城崎)、川端康成『伊豆の踊り子』(湯ヶ野)など。

★木下利玄は大正5年6月、31才のとき妻照子が病身なため東京を出発して二人で長い旅にでか

けて、城崎温泉には3カ月滞在した。そのご三朝、玉造温泉にたちよっている。

★山陰地方の温泉文学の代表作として直哉の小品『城の崎にて』がある。また『暗夜行路』には城崎温泉、東郷温泉が登場してくる。

★大正2年の田山花袋『温泉めぐり』には山陰の各温泉地が詳細に記録されている。

## ●II 昭和・平成時代(1926～1988, 1989～)

### ▼主な出来事

★昭和2年11月10日、城崎温泉では「三木屋」の内湯設置のことで湯島財産区議会との間に「内湯設置をめぐる紛争」事件が発生した。この紛争は長引き、その解決は戦争中で審議は遅々として進まず戦時調停に付され終戦を迎えた。そのご25年3月6日になって湯島区側の時勢の推移を察した外湯、内湯の併置主義の採用と、「三木屋」の相続人による町平和と発展のための譲歩により、23年にわたる「内湯紛争」に調停が成立した。この和解成立の根本精神は伝統の「共存共栄」、「外湯・内湯併置」の原則であった。

この事件は行政、民事の法律的な見地からも非常に注目され、川島武宜著『温泉権の研究』『温泉の集中管理の法律問題』などに詳述されている。

### ▼温泉の開発

★浜坂町に53年3月、消雪工事の水源のボーリング中に突然温泉(76度、毎分600立)が噴出した。早速「浜坂温泉開発協議会」を結成、一般住宅、旅館、民宿、公衆浴場など希望者に給湯することを決め、省エネルギー対策の一助として使用することにした。全家庭に「家庭温泉」をもつ鳥取県羽合町浅津地区の話は有名であるが、浜坂町でも全家庭に温泉の配湯に成功した(給湯開始は57年6月)。なお町内には37年に誕生した七釜温泉、二日市温泉があるが、三つを総称して「浜坂温泉郷」と呼称することにした。58年12月、「浜坂心身障害者更生保養センター」が開設された。これは兵庫県が心身障害者の保養と機能回復を図る長期滞在型の施設として計画したもので、57年国の「地域エネルギー開発利用モデル事業」第一号指定を受けて実現させたもので、家庭配湯を利用した施設である。総事業費13億円、本館、長期宿泊、トレーニング、浴室、設備など6棟、研修室、トレーニング室など各種回復訓練器具が完備している。

### ▼温泉地の施設

★城崎温泉では52年土蔵を改装して「文芸館」を開館した。城崎を訪れた文人芸術家は多いが、その直筆は大正14年の北但大地震でその大部分が焼失してしまった。町では焼け残った文化財の保護と温泉の歴史の紹介を目的に「文芸館」を計画した。

### ▼温泉地のPR

□温泉地のシンボル、記念碑など

★「夢千代日記」で全国的に有名になった湯村温泉の「荒湯」の近くに湯村温泉のシンボル「夢千代」のブロンズ像が完成した(60年4月5日)。

★“文学と歴史といで湯の町”城崎温泉では、56年駅前に『山陰土産』などの名作を残した島崎藤村の文学碑が建てられた。このほかにも同温泉にはすでに志賀直哉の『城の崎にて』や、吉井勇、田中冬二、司馬遼太郎などの文学碑が20基前後建立されている。

## ▼温泉地の対策

## □給湯設備と集中管理

★旅館，ホテルなどへの配湯の例は31年の城崎温泉が最初である．城崎温泉利用条例は25年3月公布されたが，外湯，内湯併置の実現を期して既存泉源と第3，9号のボーリング泉源を主体に31年10月，3カ所の配湯所から6カ所の共同浴場と旅館37軒に水道圧送方式により配湯した．その後34年までに温泉の分湯を希求する旅館も次第に増加したため，37年には湯島財産区議会に増湯計画特別委員会を設置して，40年5月第二次内湯配湯のための配湯管布設替工事に着手，10月から新規27軒の旅館及び寮を加え67軒に内湯配湯を実施した．しかしこれは水道圧送方式で循環方式はまだ採用されていない．

□温泉観光地としての設備対策，温泉地計画，温泉地の再開発など

## ▼温泉の研究

## □学術書など

★京都帝大石川成章講師は『日本温泉論考』（昭和3年11月）を著し，なかで京都府木津温泉，山陰道とくに鳥取県の温泉につき詳述している．

★戦前では医学を中心に数多くの文献が刊行された．当時わが国の温泉学を啓蒙した第一人者西川義方は『温泉と健康』（7年）など温泉に関する貴重な名著を多く刊行した．このほか代表的なものをあげると10年の社団法人日本温泉協会の『温泉大観』，15年酒井谷平の『温泉・気候療法の理論と実際』，18年高安慎一の『温泉の医学』など．

★戦後には医学の分野をはじめ温泉理学，温泉工学とさらに研究対象は拡大し，その研究成果はエネルギー利用，多目的利用など大きく発展しようとする動きをみせている．24年に服部安蔵『温泉化学』，岩崎岩次『温泉』，29年『日本鉱泉誌』，30年代になると北条浩『伊香保温泉資料集』，川島・潮見・渡辺『温泉権の研究』など．

40年代には武田勝蔵『風呂の湯の話』，北条浩『下呂温泉史料集』，同『城崎温泉史料集』\*，早川・馬場『地熱発電』，同『地熱—第4のエネルギー』，鳥取県厚生部『鳥取県温泉総覧』，尾代周二『群馬の温泉医学』，日本温泉科学会『日本温泉文献目録』，山形県温泉協会『山形県温泉誌』など．

\* 湯島財産区では川島武宣監修・北条浩編『城崎温泉史料集』を発行．これには城崎温泉内湯島訴訟事件の行政，民事などの諸問題につき詳細に記録されている．明治以来の兵庫県文書，湯島温泉区関係文書，温泉審議会議事録，裁判関係文書はもとより，古来からの城崎温泉関係文書，城崎沿革関係文書，城崎温泉案内記などがのせられており，城崎温泉のみならず日本の温泉史上にとっても貴重な文献である．

50～60年代以降にはさらに増加してゆくが，代表的なものを手元から拾いだしてみると，大島良雄・大島良一『温泉療養の手引き』，別府市観光協会『別府温泉史』，小嶋碩夫『風呂と健康』，丸山知良『四万温泉史』，岡田正二『富山のいで湯』，杉田丑太郎『塩原温泉誌』，山田兼次『熱海風土記』，岩崎宋純『箱根七湯』，大崎紀夫『湯治場』，高橋甚一『鳴子温泉郷』，市川善三郎『ベルツと草津温泉』，風見恂『有馬温泉史料』（上・下），箱根町企画課『箱根温泉誌』，朝日新聞社『温泉博物館』など．

## □各種学会などの開催

★第40回「日本温泉気候物理医学会」総会が（三朝温泉，50年5月）開催．

★第30回「日本温泉科学会」（温泉津温泉，52年7月），第33回が（三朝温泉，55年8月）で開催．

★「日本温泉協会総会」（玉造温泉，55年5月・城崎温泉，60年5月）開催．